

## 内容

「慕ってはいるけど、愛してはいない（笑）！」 .....	2
約束.....	3
「『最後に』って言わないで！」 .....	4
「辞めたくなくなったことないの？」 .....	5
「目が点になった」 .....	6
術前説明 .....	8
撮るのが好き .....	9
心理学の勉強をする理由.....	11
病院で「しょうかき」と言えば.....	12
落ち着き .....	12
身内.....	14
麻酔と夢 .....	14
体、壊さんといてほしいなあ。 .....	15
キレイすぎて .....	16
ノート .....	17
「受け取ったでえ」 .....	18
イケメン .....	20
必要な環境.....	21
「今日は休みです」 .....	21
部長回診の直前 .....	22
部長回診本番 .....	23
「これが私の人生です」 .....	24
クリスマスカード.....	25
退院.....	26
もっと話したかった .....	26
「撮るとききますか？」 .....	27
退院から 3 カ月 .....	28

2013年10月18日 起稿

## 「慕ってはいるけど、愛してはいない（笑）！」

今日はどういうわけか、いろいろな思い出が溢れてくるので、時間が許す範囲で書こうと思う。

私が、外科の S 先生と M 先生に出会ったのは、10 年ほど前のことだった。当時、お世話になっていた婦人科の先生に、「乳房がパンパンに腫れて、熱を持っているんです」とお話ししたら、「授乳期でない人の乳房の疾患は、外科で診てもらうことになるから」と、院内紹介をしてくださった。

その日、初診外来には M 先生がいらした。M 先生はエコーの部屋に S 先生を呼んで、いっしょに診察してくださった。M 先生と S 先生と私が、三人で一緒に会う機会は、その後ずっとなかった。2013 年 7 月、入院中の部長回診で会ったときまで、ずっと。

私は乳房の経過観察のために、S 先生の外来に通うことになった。だから、M 先生は私のことなんかそのまま忘れても良いはずだった。

初診から 5 年ほど経って S 先生が転勤されるとき、「M に頼んどこうか（笑）？」って言ってくれた。それは、私が M 先生を「好き、好き」と、あまりに騒ぎ立てていたから。S 先生も、M 先生に引き継いだこの時点で、私のことを忘れたって良かったはずだ。その後もずっと、色々なことに付き合わせて、ごめんなさい。

M 先生に診て頂いた 2 年の間、私は祖母の介護でへとへとになり、メニエール病が再発し、子宮の痛みが強く鎮痙剤の筋肉注射が必要になったりと、本当に色々心配をかけた。

M 先生に、「S 先生を愛してるんですよ」と言ったら、

「してへん！」

という短文の返事から、段々

「慕ってはいるけど、愛してはいない（笑）！」

のような複雑な返事を頂けるようになったのは、今、思い出しても笑えてしまう。

M先生からS先生へ、再び引き継いでもらうことになったとき、  
「ふゆうさんのサマリは書かへんで。S先生がよくご存知やと思うから」  
ってM先生は言ってくれた。

想えば、私がS先生に話したことは、M先生にも分かってもらえると確信できたし、M先生に話したことは、S先生にも話すことができた。離れているのに、いつも一緒なんだと思える二人が、とても羨ましかった。

## 約束

S先生が今いる病院に移られたのは、2013年4月。同じ病院にはM先生もいる。  
「じゃあ、私も移るよ」ってS先生に約束をした。

でも、私はその約束を破ろうとしたことがある。  
ある事情で精神的に追い詰められていた私は、婦人科のT先生に言った。  
「私が行けば、S先生は私に構わざるを得なくなる。でも、私が行かなかつたら、S先生は私のことを忘れはるやろうし、そのほうがいいと思う」

T先生はその日、声を荒げることもなく、  
「ふゆうさん自身のために、必要な医療を受けないといけないし、そのためには『S先生とM先生、二人ともいてはる病院がいい』ってことになったんやろ？ S先生は『来る』と思っってはるんやろ？ 黙って行けへんようになったら、どう思うかな？」  
「僕もな、ふゆうさんを通して、S先生やM先生の話、聞きたいし」  
って、静かに諭してくださった。

このときの私の発言は、S先生だけではなく、T先生にも非常に申し訳ないものだった。  
次の診察のとき、T先生は  
「俺、どんだけ不安やったか！！」  
って、怒っていた。  
「S先生とM先生とが診てくれてはるから、僕は婦人科のことを診てられたやん？」  
「はい」  
「最近はどうなくなったけど『腹痛がする』とか『吐き気がする』とかって、注射とか必要になったことがあったやろ？」  
「はい」  
「そういう時に、『なんで痛いんか』ってことが、僕一人では診きられへんから。だからS先生が他の病院へ行くっていうのも、僕は不安やったし」  
「はい」  
「ふゆうさんが、だんだん元気なくなっていくけど、僕だけでは聞けないことも、S先生やったら聞けるかもしれへんやん。だからな、『頼むからS先生のとこへは行ってくれ』

って、どんだけ思ったか！」

「すみません」

「僕としては、S先生と僕と車の両輪やと思ってたんやわ。その片方をいきなり外されたような気持ちやねん、正直言って」

「ごめんなさい」

「諸事情あったのはわかるけど、落ち着き次第、行ったほうがいいよ」

そして、約束通り S先生に会いに行った。

いきなり「手術するか？」って話になるとは思ってもいなかったけれど。

S先生のもとに入院するまで、ハント症候群になり、脳のMRIも撮ったし、循環器の先生にも診て頂くことになった。今思えば大変な日々だったけれど、

「入院までに、他の問題をできるだけ解決する」

という S先生との約束があったから、色々なことを乗り越えられたように思う。

## 『最後に』 って言わないで！

T先生に

「S先生のところへ、行かないほうがいいかもしれない」

と言って怒られていた頃、他でも同じようなことをしてしまっていた。

耳鼻科のK先生は、ちゃんと治療をしてくれていて、現にメニエール病の症状そのものは止まっている。私が元気になれないのは、他の領域のことが原因で、K先生には何の責任もないのに、時間と労力を費やしてもらって、申し訳ない。

そういう気持ちを、K先生にぶつけては、なだめて頂いていた。

3月の初め、K先生の診察に行ったとき、動悸と息切れがひどく、肩を上下させながら呼吸していて、

「……今も、呼吸が整ってないように感じるんやけど」

と、K先生に心配された。

消えたほうがいい、と思い詰めていた私が、

「じゃあ、最後に……」

と言ったとき、K先生は

『最後に』 って言わないで！ はっきり言って怖いからね！」

とおっしゃった。

私はそのとき、

「最後に……をして欲しい」

とお願いしたのだけれど、  
「やめときましよう。次にしよう」  
と K 先生は言った。

K 先生は、その後、頑張って冗談を言ったり、頑張って笑ったりした私の努力を、ちゃんと評価してくれた。

「人に迷惑をかけるから、消えたほうがいい」という考えに取りつかれていた私。  
「人のために。迷惑をかけないために」って言いながら、結局は自分の考えしか見えていなかったのだ。

### 「辞めたくなかったことないの？」

S 先生は初め、  
「手術は乳腺専門医の Z 先生にお願いすることになるけど、俺も補助者として入らせてもらう」  
と伝えてくれていた。

ところが、事務的な手続きの行き違いがあり、S 先生が不在の期間に私の入院が決まってしまった。

「痛恨のミスやなあ……」  
って言う S 先生に、何をどう答えたらいいのか、わからなかった。

### 「M 先生に、ちゃんと話しとくから」

「M 先生がいてくれるんやったら、頑張れる……と、思います」

M 先生には、2013 年 3 月に会っている。私が T 先生や K 先生を不安にさせていた時期だ。頻脈と息切れが半年ほど続き、疲れきってしまった私は、近所の開業医の先生から「循環器の手術が受けられる病院、今行っている範囲でないかなあ？ できたら診てもらわれへんかなあ？」  
と言われたことをきっかけに、強引に M 先生に会いに行ったのだ。

でも実際に M 先生に会うと、  
「(今年の) 9 月からしんどかった」  
という言葉しか発することができず、あとは泣くばかりになって、本当に申し訳なかった。

この出来事の 1 年ほど前、M 先生と話す機会があった。  
久しぶりに会ったというのに、

「M先生は、仕事辞めたくなくなったことないの？」

と聞いて、面食らわせた。

「どうしたんよ？　なんかあったんか？」

「うん、ちょっと」

「あのな、言いたいことを腹に溜めんことや。ていうか、溜めてる俺が、偉そうなこと言われへんけど」

「溜めてるんですか？」

「うん。別に『どんな風に話ししよう？』って考えてから言わんでいいし、『言うからには解決しよう』とか思わんでもいいねん。ただ、『こんなことあってん。腹立つわあ』とか、口に出すようにしたほうがええと思うねん」

「口に出す」ってことを、うまくできなかつたから、3月に迷惑をかけることになったのだ。

M先生ごめんなさい。そして、ありがとう。

## 「目が点になった」

入院の1か月前、初めてZ先生の診察を受けた。

S先生から、

「医局でちゃんと話すとくから。ふゆうがZ先生のところへ行ったときには『聞いてます』って、言ってもらえるようにしとくから」

って言ってもらえていた。

だから、Z先生が、

「S先生から聞いてます」

っておっしゃったとき、S先生と同じ言葉やなって思って、安心できた。

いっぽうのZ先生は、後に

「目が点になった」

って言ってはったと、S先生から聞いた。

直接の理由は、

「M先生っていらっしゃいますよね？」

「はい」

「私、M先生がめちゃくちゃ好きなんです」

という私の告白だったそう。

でも、これ以外にも他にも色々と怪しい発言をしている。

「乳汁や血液が出るというのは、どの位前からですか？」

「写真あります」

汚れまくった T シャツの写真を何年も保存し続けている私は、怪しかったかもしれない。

「僕が今日、確認したかったのは『どの乳管から血が出ているのかが、わかるか？』という点だったんですよ。それで、さっきの診察では、残念ながらわからないですね。今は、乳汁は止まっていますよね？」

「あの、実はこの間までステロイドを飲んでいて、それで乳汁が出にくくて」

「ステロイド？ それは、どうして？」

「顔面神経麻痺（ハント症候群）だったんで」

「ほお！」

「さて、乳管から管を入れて腫瘍をとるという方法が使えないんで、全身麻酔になりますが」

「はい。全身麻酔、12年ぶりです」

「え？ なんか受けたことが？」

「あの、耳の後ろの骨を電気ドリルで削って、内リンパ嚢を破ってもらう手術を」  
そんな生々しい言い方をしなくても、普通に『内リンパ嚢開放術』でよいと思うが。。。

「では、入院の日程を決めますが、お仕事の都合は？」

「フリーライターなので、時間の融通はききます」

「え？ フリーライター！？ だから、時間の融通はきき……」

「あの、名刺を……」

別に、ここで名刺を出して、身分を証明しなくてもよかったのだと思うが。。。

そして M 先生の話。

「私、M 先生がめちゃくちゃ好きなんです」

「はっはっはっはっはっ(笑)」

Σ (□□) !!

「え、どういうこと(笑)？」

「M 先生は、私にはけっこう冷めてはるんですけど、私はあの大きさが好きで好きで」

「……」

きっと Z 先生は、

「なぜ、M 先生を知っているのか？ しかも唐突に愛の告白をするのか？」

ということを知ったかったのだ。

私のずれた返答が積み重なって、Z 先生は「目が点になった」のだと改めて思う。

## 術前説明

入院した日、荷物を整理してベッドに腰掛けて一息ついていたら、Z先生が来てくださった。

「今から話しましょうか。一人で大丈夫かな？」

面談できる部屋に連れて行ってくださり、病気のこと、手術のやり方のこと、術後の予想、手術に伴うリスクなどお話しくくださった。

Z先生が、エコーの画面を閉じる寸前に、思わず言ってしまった。

「あの、撮影していいですか？」

「はい？ え？」

Z先生はかなりびっくりして、私の顔を見られた。

「あの、せっかくのエコー……」

「この画面を、ですか？」

「はい！」

素早くデジカメを取り出す。

「ちょっと待って。もっとええ画面撮っといたら？ ええの探しますから待ってねえ」

「ありがとうございますっ！」

実は、術前検査結果をS先生がチェックしてくれはったときも、私は胸部レントゲンの画面を撮影させてもらった。

S先生と私の間には暗黙の了解があるけど、それを見ていた看護師さんは、爆笑してはった。

Z先生は、映りの良いエコー画面を探してくくださった。

「よし、この画面、撮っといたら？」

かしや！

「あー、蛍光灯が入るなあ。画面の角度、変えるからもう一回どうぞ！」

「ありがとうございますっ！」

かしや！

「おお、今度はいけましたね」

「ありがとうございますっ！」

私は Z 先生がとても好きになった。

「あの、前なんですけど」

「はい」

『目が点になった』って言うてはったって、S 先生から聞きました。ごめんなさい」

「僕が『目が点に』ってことですか？」

「あの、M 先生のことで」

「ああ！ 知らなかったもんでねえ」

「すみませんでした」

「いえ、いいんですけどね」

「M 先生は、私が体重 44 キロしかなくなったとき、気付いて注意してくれはって、今は、それから 8 キロ増えたんです！」

「……」

それを、説明する必要があるのか、自分？

「すみません」

「いえ、いいんですけどね」

Z 先生は心が広い。

「後でエコーをしたいんで、また呼びに行きますね」

手術前、最後となるシャワーを浴びてから、Z 先生にエコーの部屋へ呼ばれた。

「傍乳輪切開でいけそうやけどなあ」

Z 先生は、画面が私に見えやすいように、たびたび画面を動かしてくれた。

術前説明のとき、エコーや他の検査結果などの画面を、興味津々で見つめていた私に、Z 先生は気を遣ってくださったのかもしれない。

## 撮るのが好き

私が入院する 1 週間ほど前、

「看護学生がツイッターで臓器写真を公開した」

というニュースが流れた。

この学生に非があるのは確かだ。

- 写真に添えられていた言葉は、献体してくださった患者さんへの侮辱であること
  - そのような画像を見せられる側の心情を考えていなかったこと
- など、様々な角度から「非がある」と言えるだろう。

このニュースが流れる前だが、私は耳鼻科の K 先生から、

「今回は、患部を直接撮った写真をホームページに載せんようにね。ハント症候群の写真

を載せるのとは違うからさあ」  
と注意を受けている。

ただ、私は

「病気になってから慌てて知識を得るのではなく、まだ肉体的・精神的に余裕があるときに、あらかじめ知識を得ておく」  
ということが、後にどれだけ役立つか、身をもって知っている。

それは、2008年の夏、S先生との話の中で起こった。

偶然に「内臓」の話題になり、S先生が病理学か解剖学か、そういった本を開けて見せてくれた。S先生がたまたま開けたページには「腸穿孔」の解説が書かれていた。

その3日後、私の祖母が腸穿孔になり、救急搬送・緊急手術を受けた。

執刀した医師の説明を受ける際には、「腸穿孔」のイメージをおぼえていたということが、私の気持ちをととても落ち着かせてくれたのだ。

腸穿孔のようなマニアックな写真までは探さなくてもいいけれど、もっと「内臓」がどうい風になっているのか、私たちは積極的に知るべきだと思う。

さて、人工肛門を造ってもらった祖母と過ごす日々の中で、私のメニエール病が再発。

「オージオグラムの結果をコピーしてもらおうように」  
とK先生に促された。

紙製のデータをコピーしてもらおうとともに、デジカメで撮影するようになったのはいつごろからだっか？

乳房の症状が激しくなり、1晩で汚れに汚れてしまうTシャツを撮影するようになったのは？

このような習慣が、もともとあることをご存じないZ先生に、

「エコー画面を撮っていいですか？」  
と聞いて、硬直されたのは仕方ない。

それ以来、ことあるごとに、

「撮っていい？」

「撮っていい？」

と聞く私に、

「写真撮るの好きじゃねえ！」

と呆れたように笑ってくださったZ先生が大好きだ。

## 心理学の勉強をする理由

入院した日、心理療法士のLさん（女性）が訪ねて来てくださった。

私は放送大学のテキストに、ガムテープを貼ってタイトルを隠してから入院するつもりだった。なぜなら、医療のプロの方々の前で、自分がそんな基礎的なテキストを勉強しているのは、恥ずかしいような気がしたからだ。

しかし、うっかりしていて、テキストをそのままカバンに放り込んだことを後悔していた。入院した日は、看護師さんやZ先生とも話をしなければならず、ガムテープを買いに行つて貼る余裕はなかった。

Lさんにテキストを見られたときは、ちょっと恥ずかしかったけれど、「なぜ、心理学を勉強しようと思っているのか」を、Lさんに話すことができた。

「耳のホームページにメッセージをくださる患者さんは、病名がついたばかりだったり、手術前などで、普段と違う心理状態になってはりますよね。普段なら言わないことまで、しゃべってしまいます。後になって、しゃべったという事実を患者さんが後悔するようなら、私の接し方が失敗だったということになります」

「メニエール病という病気の性質上、手術が必要となる方はある程度の年齢に達しておられます。私はそれに比べて人生経験が浅く、『勘』だけで対処していくことには限界があると思ったので」

と話したら、Lさんは

「大事な部分をちゃんとわかってらっしゃる」

と言ってくれはった。

「話したいことは、何でも言ってくださいね」

「あの、Lさんが美人だと思います」

「……」

「……何でもって……」

「ありがとうございます。手術がんばってくださいね」

「ハイ！」

だって本当にキレイだったんだもの。。。

## 病院で「しょうかき」と言えば

かつて私は、ABC 消火器に充填されている粉末を吸い込んで、咳喘息になった。開業医の先生のもとで、1年近く治療を受け続けて、やっと咳が止まった。

しかし、後に気管支喘息の症状が出るようになった。

さて、病院で「しょうかき」と言った場合、「消化器」のことを言っていると、ほとんどの人は思うだろう。

手術当日の朝、手術室の看護師さんが訪ねて来てくださったときのこと。

「喘息と診断されたことは、ありますか？」

「はい、ありますが、現在はほとんど症状がありません」

「何かアレルギーを起こした経験はありますか？」

いくつかの経験を答える。

「薬剤のほかに、何かアレルギーを起こしたことはありますか？ 食べ物とか……」

「あの、『しょうかき』ってありますよね」

「……？ えっと、消化器って範囲が広……」

そうなりますよね。。。

「その消化器ではなく、火を消す消火器なんです」

「あ、はい」

「その中身を吸い込んで、咳喘息になって、その後、気管支喘息になったんですよ」

「なるほど、そうだったんですね」

私たち患者は、主に外回りの看護師さんと話すことになるし、患者の体に触れるのも外回りの看護師さんなので、その人の印象のほうが強いのは確かだ。

でも、私が手術室に行ったときは、器械出しの看護師さんの動きが忍者みたいで綺麗だった（失礼でしたら謝ります、ごめんなさい）ことが、印象に残っている。ハキハキした印象の外回りの方に比べたら、器械出しの方は優しくておとなしい感じだったけれど、物の間を縫うようにして、さりげなく、すばやく動かれていた美しい動きを今もおぼえている。

## 落ち着き

私の手術は11時からの予定だったが、事前に看護師さんが、

「前の手術が長引く可能性が高いので、午後にずれ込むかもしれない」

と知らせてくれた。

ベッドで点滴を入れてもらい、手術室へは点滴スタンドを押していくことになる。

20 ゲージの針がなかなか入らず、悪戦苦闘する看護師さんに、

「私の血管が細いから、ごめんなさい」

って謝っていたら、Z先生が来てくださって、

「20 ゲージ。長っ！」

っておっしゃったのが、なんか面白かった。

手術室へ看護師さんが連れて行ってくれた。

若々しくて、色が白くて、素敵なお方だなあと思っていた。

「手術前ですけど、落ち着いてはりますね」

「手術の経験、12年前ですけどあるんです」

「そうなんですか？」

「12年前は、病室で筋肉注射を打ってもらって、ベッドごと手術室へ移動して、手術後の安静期間も長くてって感じでしたけど、時代が変わってますよね」

「どこを手術されたんですか？」

「耳です。メニエール病で」

「そうなんですか」

「あと、祖母が二人とも人工肛門で」

「へええ」

「で、S先生やM先生に色々聞いていただいてたんですよ」

こんな話をがちゃがちゃ聞かされても落ち着いている看護師さん、さすがやなあと思っていた。

後に、この看護師さんが夜勤をされていたとき。

「大変ですね。眠くないんですか？」

「3カ月たって、ちょっと慣れて来ました」

「え？ 3カ月って」

「私は、看護師になって3カ月です」

「ぐわあ。めっちゃ落ち着いてはるから、ある程度、経験がえられるのかと」

「あまり、こちらが慌てていると、患者さんに伝わりますから」

いや、もう、すごいなあ。そのプロ意識がすごい！

## 身内

5, 6年前、M先生が上部内視鏡を手配してくださったとき、

「誰か、身内の方についてきてもらえる？」

と聞かれた。

同じ検査で、身内の付き添いを求められたのは初めてなので、思わず

「え？ 身内？」

と聞き返した。

M先生は、「身内」という言葉の意味を、解説してくれはった。

「ふゆうさんの、ご両親とか、ご兄弟とか……」

「え、あの、それは分かるんですけど（笑）、今まで身内ついてきてなんて、言われたことないよ？」

「そうやったか？ 鎮静剤使うから、運転できへんで」

「うん、免許ないです」

「自転車もやで」

「はい(笑)」

これ以外で、身内の付き添いを求められたのは、K先生の内リンパ嚢開放術のときと、整形外科で簡単な手術を受ける、その術前説明のときだけだった。

だから、S先生もM先生も、私の身内に会ったことは無い。

入院前、Z先生にも、

「手術当日は立ち会ってもらえますが、それ以外の日は事情で無理です」

ということ、S先生を通して伝えて頂いた。

感情の部分には触れないことにするが、母は公務員のため、参議院選挙の期日前投票に立ち会わなければならず無理。

父は、退職の時期と重なったため、挨拶回り・身辺整理などで忙しく、女性の病室に男性が長くいるのは、何かと差し障りもあると思われたため、無理。

手術の日を迎えたとき、11年もお世話になっているS先生やM先生にも会ったことのない身内が、Z先生とは話しているということが、なんだか不思議な光景に見えた。

## 麻酔と夢

手術が終わった時、麻酔の先生は

「ええ夢、見られたやろ（笑）？」

とおっしゃった。

夢の内容はおぼえてないけど、何か楽しかったのは確かだ。

同時に、

「Z先生、どこにいるの!？」

っていう気持ちになった。

実際にZ先生が近くにいてくださることが分かると、とても安心して笑顔になることができた。

手術の前、外回りの看護師さんが

「導入始めます」

という電話を、Z先生にかけたら応答がなかったそう。

麻酔の先生が、

「Z先生の顔見てから、眠ろうね。Z先生が来はるまで待とう」

って言うてくれはった。

その後、すぐにZ先生が入室されたので、待ったのは短い時間だったけど、

「Z先生、どこにいるの!？」

という気持ちは、そのことと関係あるのかなあ？

「麻酔で眠っていたときの夢って、何やったんかなあ？」

それは謎のままだけれど、「何か楽しかった」という感覚と、目が覚めたときの色々な気持ちは、今も思い出すことがある。

## 体、壊さんといてほしいなあ。

手術が終わって、病室に戻った。

しばらくすると若い先生が

「傷口を確認させてくださいね。出血していないか診るだけですから、すぐ終わりますよ」

と、ベッドサイドに来てくれはった。

確認が終わったとき、若い先生を指導する立場のM先生が、

「ようっ!」

と声をかけてくれはった。

私が入院した日は、病棟スタッフの皆さんは非常に忙しくされていた日で、M先生にも会えていなかった。

このとき、初めてM先生の顔を見たのだから、ちゃんと挨拶すべきだったのに、

「ああ、先生！ 相変わらずでっかいねえ」

って言うてしまった。

自分、もおさいあく。。。。

M 先生は、それでも笑って  
「どっかしんどいとか、ないな？」  
「明日には、起きられるからな」  
と言ってくれはった。

病室の天井を見ながら、M 先生と出会ってからのことをぼーっと思い出していたら、  
「M 先生は一番、私の体の広い範囲を知ってくれてはる先生だなあ」  
と気付いた。

- 初診時は乳房の診察を
- S 先生から引き継がれたときは、たまたま蜂窩織炎を患っていたので脚の診察を
- 診察のたびに目の下の粘膜の視診、首の触診を
- 主に胃の調子を診てもらっていたので腹部の聴診&触診を  
してもらっていたから。

メニエール病が再発した頃、自分でも気付いてなかった「痩せすぎ」に気付いて、真っ先に怒ってくれはったのも M 先生だったのだ。

S 先生は時々、  
「M とふゆうは、よう似てるわ」  
と言わはるけど、こうして書いてみると、私は M 先生ほど善い人間ではないと思う。  
いつも重症の患者さんがいてはる M 先生。体、壊さんといてほしいなあ。S 先生も気にしてはったし。

## キレイすぎて

手術した翌日、傷口の様子を診に、回診担当の先生が来てくれはった。  
「キレイですね。シャワーとかは、もう行かれています？」  
「え？」  
「手術から、もう日数経ってるなら、いけるんちゃうかな？ 手術いつでした？」  
「昨日です」  
「ははははははは(笑)」  
Σ (□□) !!  
「え？」  
「昨日、ですか (笑) ? それやったらちょっと無理ですね。いや、あんまりキレイやかから、もう何日も経ってるんかと思った。キレイすぎて勘狂うわ(笑)」

傷口の回診は、術後 4 日目まで続いた。  
気付いたのだが、回診の先生は 10 時半から 11 時ごろに回って来られる。  
でも、私の手術の日、Z 先生は 9 時ごろに回診をされていた。多分、私の手術が 11 時に

予定されていたから、Z先生はいつもと違うパターンで動かざるを得なかったのだろう。申し訳なかった。ごめんなさい。

## ノート

成人喘息になったとき、100均で1冊のノートを買った。

「喘息手帳」として使おうと思ったのだ。

それまでも、痛み止めや吐き気止めを重ねて飲んでしまわないように、服用の時刻をメモしてはいたが、1日が終わったらメモは捨てていた。

やがて、「咳の記録はノートに、服薬の記録はメモ用紙に、検査の結果はファイルに、基礎体温は基礎体温表に」と分けるメリットはないように思え、ノートと基礎体温表に情報をまとめることにした。

現在は11冊目のノートを使っている。

5年ほど前、私のことをM先生に引き継いで、転勤されたS先生に会う機会があり、

「M先生へのメッセージを書いて」

とお願いした。それがノートを先生とのコミュニケーションに使うようになった、直接のきっかけだった。

そのとき、S先生は、

「忍」

って文字を書きながら、

「これは、Mだけじゃなくて、ふゆうにも言いたいことや」

と伝えてくれはった。

また別の時、S先生にお願いした。

「婦人科のT先生へのメッセージを書いて」

「どんな先生なん？ 会ったこともないから、何書いたらいいか……。イメージだけでも教えて」

「うーんとね、□□先生を優しくしたような……」

「□□さん、怖いんか(笑)?」

笑いながら書いてくださった。

「T先生、一度お会いしたいです。(後略)」

(後略)の部分、S先生は、

「軽い人間やと思われたかなあ？」

と言ってはったし、T先生もこの部分を読んで、

「えっ……なっ、何なん！？ この先生は（笑）」  
って爆笑してはった。

そして後に、  
『一度お会い』どころか、一緒に働くことになるとはなあ（笑）」  
と、二人とも笑ってはった。

今回の入院前に、T先生に  
「M先生へメッセージを書いて」  
ってお願いした。

T先生は、先に書いた（後略）の部分に負けないほど激しいメッセージを書いてくださったので、このメッセージを預かってくださった看護師さんは、驚いたかもしれない。

### 「受け取ったでえ」

手術が終わってから翌日の朝までは、看護師さんが1時間に1回、夜は2時間に1回、様子を見に来てくださる。

来る人来る人に、  
「S先生とM先生は愛し合っているのです、ずっと前から」  
という話を聞いてもらった。

手術の翌日、朝早くには副看護師長さん（男性）が来てくださって、  
「参議院選挙の不在者投票を当院でも行います。その申し込み用紙を持ってきたんですけど、まずベッド起こしますね」  
と言って、ベッドを起こしてくれたり、申込用紙を書きやすいように広げてくださったり。  
「今日から、歩けますからね。担当の者にカテーテルとか抜いてもらえますよ」  
って言ってくれる。

手術の翌日からは、ベッドから起きて、できるだけ普通の生活に戻ることを勧められる。

まずは、担当の看護師さんと一緒に、尿道カテーテルや点滴をつけたまま歩いてみる。  
歩けることが確認できたら、尿道カテーテルを抜いてもらい、動きやすい服装に着替える。  
水を飲んでもむせ返らないことが確認でき、昼食の重湯を一定の量以上食べることができれば、点滴をはずしてもらえると聞く。

点滴スタンドを押しながら、お茶を汲みに行ったら、スタッフステーションでM先生が手をあげてくれた。嬉しかったなあ。でも、スタッフステーションにいてはった他の先生は事情を知らないの、ちょっとびっくりしていた。

T先生からの手紙は、まだM先生に渡せていなかった。入院初日はだれもが忙しそうだったし、次の日は私も手術があった。

それに、Z先生は、

「せっかくやから、直接渡したらええやん。M先生はぜったい病棟に来るんやし」  
って言うてくれはった。

でも、恥ずかしかったので(今さら?)、担当の看護師さんが点滴を外してくれたときに、

「T先生という人がいて、その人からM先生宛の手紙を預かっているのです」

って、渡してもらえるようお願いした。

しばらくしたら、M先生がスタッフステーションで話してはるのが聞えてきて、

「ああ、手紙を渡してくれはったんやなあ」

って分かった。

「〇〇(苗字)さん？」

完全に私の苗字が分からない様子だったけれど、名前はおぼえてくれた。

M先生の手到手紙が届いたことで、安心しきっていたけれど、数十分後にいきなり、

「メッセージは受け取ったでえ」

って声が病室に響いてびっくりした。

いきなりだったので、何が起こったのかわからず、放送大学「心理統計法」のテキストを胸に抱いて、硬直していた。

M先生が来てくれはったってわかったら、とても嬉しくなった。

「いつまで居てるん？」

「1週間の予定って言われてます」

「そっか。どうや、しんどくない？」

「うん！ 大丈夫。あのT先生が愛を……」

「手紙はもらった！」

「早く、愛の飲み会を……」

「S先生、動いてくれたら嬉しいけどなあ……って、何を勉強してんの？」

「あの」

「何？」

「あの、(放送大学テキスト「疾病の成立と回復促進」を見せながら)このページって何  
が書いてあるんか、理解できへん(泣)」

「ん？ ……どわ、なんで肺癌の勉強なんかしてんの!？」

「大学の試験なの」

「確かに、これは読みづらいな」

……M先生に教えてもらったので、肺癌のところはよくおぼえることができた。

## イケメン

術後3日目は、土曜日だった。

M先生が来られていて、ずいぶん疲れている様子だった。

私が、エレベーターの前あたりで本を読んでいたら、M先生が声をかけてくれた。

「もう帰れるんちゃうん？」

「あ、はよ帰って欲しいんや(笑)？」

「いや、暇やろなあと思って」

「勉強してるから、大丈夫やねん」

「そうか。頑張ってるな」

「あ、新しいイケメン見つけた！」

「どこで見つけんねん(呆)」

ガラケーの待ち受け画面を見せる。

「……ホストみたい」

「ホストの役をしてるときの写真やねん」

「役？」

「俳優の人やねん」

「まあ、イケメン好きが幸せなら、別にええけどな(笑)」

「ぐはっ！」

「そうや。火曜日って、まだ居てるか？」

「火曜日？」

「うん。S先生が帰ってくるの、火曜日やねん。聞いてない？」

「S先生からは、それ聞いたんですよ。まだZ先生から、いつ退院とは言われてないけど、もともと手術後1週間やから、部長回診の日に会えるかなって、S先生は言っはった」

「そうか」

「先生、休まれへんの？」

「うん、ちょっとな。重症の患者さんおるからな」

「目の下、真っ黒になってるし、大丈夫なん？」

「大丈夫、大丈夫。これはもとの色や(笑)」

「今も、S先生と愛し合ってるやろ？」

「……ふっ……ふっ……まあ、ゆっくり休んでいき」

M先生は、連休もろくに休めず、私のような変なのに絡まれて、本当に大変だったと思う。

私にとって M 先生は最高のイケメンだ。

## 必要な環境

連休中にも、傷口の回診は行われるし、看護師さんによる検温・血圧の測定などもある。術後 4 日目には採血が行われる。

看護師さんは、いつも優しい。

「世間は連休なのに、大変ですね」

「ええ、でも、平日にお休みいただけたりもするんでね」

傷口の回診の時間。回診の先生は、病室に入る前にエプロンをつけながら、

「この患者さん、手術の翌日に診たの、おぼえてるわ」

とおっしゃっていた。

たぶん傷のキレイさと私の名前、両方のインパクトが「おぼえてる」の理由だろう。

私は入院・手術のことを、ほとんど誰にも言わなかった。

私は仕事や、そのほかの活動（耳のホームページも含めて）でも、自分を取り巻く環境が変わってきたことに、気付いていた。その変化についていこうか・いくまいかと悩み、結局は眼前のことへの対処ばかりを繰り返して、大きな視野を持たなくなっていることも、ちゃんとわかっていた。

また、放送大学の授業も視聴が遅れがちだったので、遅れを取り戻さなければいけなかった。

一度、静かに考えたい。

入院することを機会に、自分だけの時間を持ちたかった。

だから、誰にも言わず静かに過ごすことを選んだのだ。

でも、連休には同室の人へのお見舞いに来る人が多く、病室はとても賑やかで、傍で見ているだけの私も楽しい気持ちになった。その賑やかさがなかったら、私は孤独の迷路にはまりすぎ、極端すぎる結論を出してしまったかもしれない。

神様は、私に必要な環境を、ちゃんと用意してくれていたのだと思う。

## 「今日は休みです」

7 月、「海の日」の夕方。病院で夕食の配膳が始まり、看護師さんが病室に出入りし始めた。

「調子はどうですか？」

「え？」

男性の声だったので、しばし混乱。

「あ！ Z先生」

Z先生はカーテンを閉めながら言ってくれた。

「傷の具合、診せてね」

あまりにも自然な動作だったので、普通にキズを診ていただいたけれど……。

「ちょっ、先生、お休み取れなかったんですか！？」

「いえ、今日は僕、休みです」

Σ (□□) !!

「大丈夫ですか？ 体、気を付けてください」

「大丈夫です。はっはっはっはっ(笑)」

って笑って去って行きはった。

自分の体に気を付けきれていないのに、プロのZ先生に何を言っているんだ。

Z先生に初めて診察していただいた日から、Z先生の歯切れの良い笑い方が、とても好きだった。この日も、豪快に笑ってもらえて、嬉しくなった。

## 部長回診の直前

病院の朝ごはんは7時30分ごろ。

火曜日の朝、同室の患者さんのもとに、担当の先生が来られて、

「今日は部長回診があります。緊張していただかなくていいんですけど、急に大勢で訪ねてきたら驚かれる方もいるんで、お知らせしておきますね」と話された。

それまで、朝ごはんを食べていた私は、急に喉が詰まった。

私は、12年以上前、内リンパ嚢開放術を受けて入院した。そのうち最後の部長回診のとき、転換性障害でぶっ倒れたことがある。

K先生を慌てさせ、心配をかけたことはもちろんだし、他の先生、同室の患者さんも驚かせ、本当に申し訳ないことをした。

それから10年ほど経ったとき、つまり今回の入院より2年ほど前、

「表情とか、雰囲気とか、ずいぶん変わりましたよね？」

って、K先生は言ってくれはった。

「10年も経てば(笑)」

「いや、時間の問題ではなくて、表情とか雰囲気とか、ものすごい変わってるよね？」

でも、この日、朝ごはんが食べられなくなった自分の根本的な部分は、実はあまり変わっていないのではないかと思った。

食器を配膳車に戻した頃、Z先生が来てくれはった。

「今日は、回診がありますんでね」

「はい」

放送大学のテキストを閉じて正座したとき、部長先生が入って来られた。

## 部長回診本番

Z先生にお会いする前、S先生に聞いた。

「Z先生って、どんな先生？」

「大きくて、かわいい先生」

「M先生みたい？」

「いや、Mとはちょっとタイプ違うな」

入院し、看護師さんにその話をしたとき、

「ここの外科の先生、みんな大きいんですよ。M先生は別格として、Z先生もやし、S先生もわりと大きいし、部長先生も背が高いし……」

って話してくれはった。

部長回診で初めてお会いした部長先生は、Z先生ほどではないけれど、大きい先生だった。

Z先生が

「〇〇の検査を……」

というたびに

「ネガティブやった？」

「ネガティブやった？」

って尋ねる部長先生は、患者のことを思ってくれてはるんやなと感じた。

そのうち、S先生が部屋に来て、Z先生が診てくださる以前の経過を、部長先生に話してくれはった。

やがて部長先生が他の患者さんのもとへ行きはって、S先生とM先生が話しかけてくれはった。

「退院なん？」

「いえ、まだ聞いてないけど、(この瞬間、Z先生は何か言いたそうにされた)、でもM先生は早く帰って欲しい……」

「フッフッフッフッフ。俺、フッフッフッフッフ……そんなこと言ってないぞ(笑)」

「言ったとは言っていない(笑)」

「あ・の・と・き・は！ 休まれへんかって、疲れとったの！ だから、そっけなかったの！ そんなん思っただけから、心配すんな」

S先生とZ先生は下を向いて笑ってはった。

部長回診の後、Z先生が改めて来てくださった。外来もあって、忙しかったと思うのに。

「退院、いつにする？」

「いつ……、Z先生はいつがいいですか？」

「僕はいつでも(笑)、今日は無理やけど、明日でも、明後日でも」

「じゃあ、明日に」

「わかりました」

「その後って、外来とか……」

「1回は、僕の外来に来てほしいねん。傷の具合を診たいから。そのあとは、S先生にお願いしようかなと思ってる」

「それは、寂しいです」

「え(驚愕)！？ なんで？」

「だって、Z先生、ステキやなって……」

「ふふふふふ(笑)」

「ふふふふふ(笑)」

この後、Z先生にお礼の手紙を書いた。

手術室でZ先生を見つけた時の安心感。「海の日」の夕方に会えた時の嬉しさ。Z先生の笑い方がとっても気持ちよかったこと。

書きたいことが溢れてきて、止まらなくなったけれど、忙しいZ先生の時間を、手紙を読むために割いてもらうのが申し訳ない気がして、なんとか手紙を終わらせた。

## 「これが私の人生です」

私の入院予定を知っていた数少ない人たちに、「退院できることになりました！」と連絡をした。

その中でもY先生はとても喜んでくださった。

入院する少し前、私はハント症候群にかかったけれど、主治医のK先生は学会で留守だった。そのため臨時的に、Y先生にアドバイスを頂いた。Y先生は、2008年から2009年にかけて、私のメニエール病が再発した際にも、とてもお世話になっている。

Y先生は、

「患者さんが一生懸命生きていくことのお手伝いをするのが、僕らの生業ですから」とおっしゃったことがある。

「カッコいい……」

いつか私も、こういう言葉を言えるようになりたいと、心から思った。

だから Y 先生に、

『これが私の人生です』と言える生き方を見つけられるよう、生きてゆきます」と、(一方的に) 約束をしたのだ。

これから、どんなに辛いことがあっても、たとえ真っ暗闇に放り出されたような気分になって、自分の心すら見えなくなったときでも、「これが私の人生です」と言える日が来ることだけは、信じていたいと思う。

## クリスマスカード

退院前日の夕方、M 先生に会った。その日は、長い手術が行われ、先生方はみんなお疲れの様子だった。

M 先生に言った。

「明日、退院します」

「ほお！ 明日から俺、学会や」

「じゃあ、これでさようなら、ですね」

「外来は、来るやろ？」

「うん！」

そのとき、M 先生が

「ほら、ちゃんと使ってるで」

って見せてくれたものがある。

すごい嬉しかった。すごい！！

昔、同じようなことがあったのを思い出した。

それは、私が介護後の燃え尽き症候群と、メニエール病の再発により、「私は誰の役にも立たないし、K 先生に手術してもらったのに成果を台無しにした。Y 先生にも面倒ばかりかけて、なかなか良くなれない。だから、もう消えたほうがいい……」と思い詰めていたときのこと。

M 先生の外来に行ったら、私が差し上げたクリスマスカードを、机に飾ってくれた。

「ほら、ここに飾ってるで」

って言ってくれたとき、「ああ、こんな私のしたことを、喜んでくれる人がいるのだ」と嬉しかった。

思えば、M先生はいつも、  
「手紙、読んだよ」  
「仕事はどうなん？ また見せて」  
って言ってくれた。

M先生、ありがとう。  
いつも、憎たらしいことばかり言って、ごめんなさい。

## 退院

退院の日の朝、S先生がベッドのそばまで来てくださった。

「おはよう！」

「ああ、S先生、おはよううう！」

「退院なんやって？ 良かったな」

「はい。お世話になりました」

「Mは今日から学会でな」

「うん、昨日、夕方に会ったんですよ。M先生、連休もずっと来てはったし、椅子に座るときに『ふい〜』って言ってはった。M先生は、大丈夫って言ってはったけど、手とかめっちゃ熱くなってるし。無理してはるんちゃうんですか？」

「うん、してるやろな」

「あの、Z先生は素敵な先生やった」

「うん。だから言ったやろ？ 『かわいい』って」

「かわいい」ってそういう意味やったんや。。。

同室の患者さんと、別れを惜しみながら話しているうちに、退院の時刻が近づき、Z先生が来て下さった。

「先生、愛の手紙を書きましたので受け取ってください」

「愛の手紙。ありがとう。後で読ませてもらうね。傷口は……いい感じですね。あのね、傷そのものはこれからも綺麗になっていくと思うんですわ。ただ、(傷を留めてある)ボンドが、ちょっと汚れて来るかもしれへん。でも、大丈夫ですから。また外来、来てね」

「ありがとうございました」

父に迎えに来てもらい、支払いを済ませて帰宅する。

## もっと話したかった

私は、仕事のこと、勉強のこと、そのほかいろいろなことを、一人で考えたかった。だか

ら、入院する事実はほとんど誰にも伝えなかった。  
そして、実際に入院すると、一人で過ごす時間はいっぱいあった。

いっぽうで、Z先生とはほぼ毎日会えたり、M先生やS先生も気を遣って声をかけてくれて、同室の人たちともすっかり仲良くなれたので、思ったよりたくさん話した。

それなのに、病院を出るときには、

「Z先生ともっと話したかった」

「S先生やM先生に、仕事のことやそのほか色々なこと、話しておけばよかった」

って、なぜか強く思った。

別に「もう会えない」というわけじゃないのに。

数か月前には、

「S先生の前からは、消えたほうがいいですよね」

って言っていたこともあるのに、私は勝手な人間だ。

同室の患者さんとは、入退院の時期が重なっていたから、

「家帰ったら、家事が溜まってても、無理せんところ。適当にしてたって、暮らせるんやから」

と話していた。

でも、人間の心って思い通りにならない。

「今日は、ここだけ掃除する。それ以外はしない！」

って決めていたのに、いったん掃除を始めたら、全部やらないと気がすまなくなって、結局、溜まっていた家事を一気に片付けた。

## 「撮るときですか？」

退院してからおよそ2週間後、Z先生の外来へ行った。

Z先生は、本当によく笑ってくださるので、楽しい気持ちになる。

検査結果などの画像を表示してくださるとき、写真を撮るのが好きな私に、

「この画面、撮るときですか？」

と聞いてくれはった。

「あの、S先生とM先生に『愛し合っているのですね』と言っても、絶対『うん』とは言わはりませんが、Z先生のごことは、『かわいい』って言ってはりました」

「……な……何を……僕は今、何を、聞いているの(笑)? ごめん、理解できる範囲を超えてて、話が見えない(笑)」

「『S先生とM先生は愛し合っているのですね』と言っても、絶対『うん、愛し合ってるよ』とは言わないけど」

「それは普通、言わんでしょう（笑）、愛し……（笑）」

「でも、Z先生のことは『かわいい』って」

「まあ、ありがとうございます（笑）」

Z先生、先生が笑ってくれると、私はとても幸せで、楽しい気持ちにさせてもらえました。

Z先生がいてはるから幸せって思う人、患者さんに限らず、きっとたくさんいてはる。

だから、これからも笑っていて欲しいです。本当に、ありがとうございました。

## 退院から3カ月

乳腺外科への入退院に関しては、「記録をあえて書こう」という意識はなかった。

耳鼻科のK先生は、

「普段、隠している部位の写真を、わざわざホームページなんかで見せると、ふゆうさんの意図はどうであれ、変な受け取り方をされるリスクのほうが大きい」

とおっしゃっていて、私もそう思っていた。

写真を見せるのと、文章で説明するのは雲泥の差があるにしても、乳房の手術を受けた人は、内リンパ嚢開放術を受けた人に比べてたくさんいる。私が書かなくても「情報が無い」と困る人は、まあいないだろうとも思った。

それでも、今こうして書いているのは、「書くのが楽しいから」という理由だけだ。

麻酔から覚めてZ先生を探した時の気持ちや、術後すぐにM先生と会えた時のこと、部長回診の朝にZ先生だけじゃなく、S先生とM先生と一緒に会えたこと。

そういう部分が、私の中にキラキラ輝く思い出として残っていて、それを文章にすることが楽しくてたまらない。

「ただ、楽しいから書く」という気持ちを、思い出すことができた記念として、書き残しておく。

退院後3カ月も経って、なぜそういう気持ちになったのか。

私にはわからなくても、神様（あるいは、何か大いなる存在）は、ちゃんとわかっている。

いつか「書いておいてよかった」と思えるときが来るのだろう。

2013年10月23日 脱稿